

# 令和4年度 園評価書

園番号 32 園名 飯田北こども園

## I 経営の重点に関わること

評価段階 (A:よくできている B:概ねできている C:あまりできていない D:できていない)

1 教育・保育目	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
心身ともに健やかで自分が好きと思える子	「こころ」・「あそび」をつなげよう	・子ども一人一人を認め、子どもが自分や友だちの良さに気づき、周りの人に親しみが持てるようにする	子どもの様々な姿を受け止めていく事を続ける中で、自己肯定感が少しずつ高くなり、自信につながる姿も見られる。友達の良いに気付く親しみをしたり、憧れの気持ちで接したりする子も増えてきたが、自分に自信のない子や友達の良いに気づかない子もいるので、今後も継続して個々の自信に繋がるよう認めたり受け止めていきたい。	B	B	・子どもの自己肯定感を育てていくことを、園として目標に掲げて、子どもたちに関わっていくことは本当に大切なことだと思ふ。一人一人の自己肯定感が、やがて集団の中で相手を思いやる気持ちにつながっていくと感じる。	・遊びの中で自分で考え、自ら行動する姿の行動や言葉・背景などから、子どもへの思いを捉え気持ちに寄り添っていく。子どもの自己決定を肯定的に受け止め、具体的に認めていく事で自信を持つ力につながる。
		・子どもが感じたことをその子なりの表現で伝えようとする姿を受け止め、気持ちを通じ合う嬉しさを感じられるようにする	子どもの思いを先読みせずゆっくり待ち、思いを表現する姿を受け止め共感すると共に、ほめる時など、より具体的に細やかに言葉をかけるよう心がけた。また、子どもの話を聞く時しっかりと受け止める事で、自分の思いが通じると嬉しそうな表情を見せ、相手の話を聞くことする姿が増えている。人の話を聞くことが苦手な子もいるが、やり取りの中で肯定的に受け止められる経験を重ね、通じ合う嬉しさを体験できるよう関わっていく。	A	A	・給食の時間の参観より、友達と一緒に食事のマナーに気づいたり、楽しんで食事を味わう様子を見て、楽しい雰囲気の中で食事をしたりしている様子が伝わってきた。	・子どもが感じる思いをその子なりの表現で伝えようとする姿を、先読みすることなく丁寧を受け止め、自分の表現で伝えた時には認めていく事で、自信を持てるようにする。また、相手と気持ちが通じ合う喜びを味わえる様にしていく。
		・子どもが好きな遊びを繰り返し試したり、工夫したりする姿を認め、共感し一緒に考えたり見守ったりしながら子どもの探究心を膨らめる	子どもの発達や成長に合わせた玩具の種類を増やしたり変化させたりした事で、アイデアを出し合う姿や友達と繰り返す場面が増えた。遊びが広がったり深まったりする一方で、うまく繋がらない事もある。子どもの気持ちを捉え、環境を工夫したり再構成したりする中で、探求心を膨らめていくかわりを心がけていく	A	A		・遊びの中で、子どもが保育者や友達とかわる経験や、そこで感じる様々な感情など、どれも子どもにとって大切な経験である事を保育教諭が理解する。その上で子どもの気持ちに寄り添い支えながら、豊かな気持ちを育てていく。

## II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を理解し、一人一人の発達や経験に合わせた援助を行う	10の姿を意識し学級経営案を作成し話し合うことで職員間で連携し、一人一人の育ちに対する援助につながる。また、乳児も基本的生活の中で、10の姿の土台になることを意識して保育している。園内研修などで「10の姿」を学び、日々の保育の中で実践する中で、個人差に配慮しながら、その子の良さを認め、課題に対して援助したり育ちを見守ったりしていく。	B	B		・幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を踏まえた上で、一人一人の発達や成長を受け止め、認めてほめて励ます事で子どもの自信に繋げていく
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	・一人一人の家庭状況を把握し、家庭での生活の連続性を大切に、一人一人の発達や経験に合わせた援助を行う	一人一人の家庭状況を理解し必要に応じて柔軟に個別の対応を行っている。家庭状況が複雑な園児や早番の長時間保育に対して、体調の変化や気持ちの安定などきめ細かに対応をしていく事で、どの子も落ち着いて園生活を送れるようにしている。今年度は新たに乳児の希望面談を設け、保護者と家庭状況も共有する事ができた。今後も家庭と生活の連続性を保っていききたい	A	A	・園の保育者皆が個々の性格、特性や、家庭環境に合わせて支援を行っていると感じる。	・一人一人の家庭環境を把握し寄り添いつつ、子どもが園での生活を安心して過ごせるよう家庭と連携していく。また、長時間保育のあそび環境を見直し、改善していく。
	(3)環境を通して行う教育及び保育	・遊びの価値づけを丁寧にし、環境を通して子どもの遊びが充実し広がったり深まったりする保育を行う	子どもが遊びのどこに面白さを感じているか保育の中で読み取り、準備をしていく中で、一人一人が遊びのイメージを持ち、繰り返し遊ぶ姿や友達と一緒に遊びに取組む姿も増えた。振り返りでは、子どもからの発信や気づきを丁寧に拾い、わかりやすい表現で具体的に認めるなど意識し、その子なりの遊びを価値づけている。興味が長続きしない子への配慮に難しさもあるが、子ども理解を大切に、遊びの継続につなげていく。	B	B	・台風15号の被災状況や対応について、普段から地域と園とが繋がりをもち、いざという時に協力しあえるような体制を整えていく必要がある	・子ども一人一人が遊びのどこに面白さを感じているか読み取り、遊びのつながりや広がりまで予測したり意識したりしながら、環境を準備していく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	・ヒヤリハットや様々な訓練を通して課題について話し合い、職員の危機管理に対する意識を高める	ヒヤリハットを意識しながら小さなことで報告をし、職員間で共有していくよう意識していくが、もっと提出が増えればいろいろな症例が共有でき、安全対策に繋がられる。分掌を中心に取組む、怪我や事故を減らす努力を続けていきたい。また、不審者訓練は、高部交番からのアドバイスをもとに話し合う事が出来た。職員間で検討をして、課題を解決していきたいと思う。	B	B	・牧ノ原の園児置き去り事件について、大きな不安を感じたが、園から日頃の対応について説明を聞き、安心して。今後も事故防止には十分配慮していつてほしい。	・子どもが安全に過ごせるよう、日々の小さなことで職員間で周知し、すぐに改善していく。また、ヒヤリハットを提出するだけでなく、職員間で検討するなど、危機意識を高めていく。
		(1)健康教育の充実	・身の回りの生活習慣が身に付くよう一人一人の発達に合わせた対応を行う	前期に築いた担任との信頼関係を基盤に、後期には子ども自ら「自分でやりたい」と身の回りのことをやろうとする姿が増えた。保育者も一人一人の発達を踏まえながら見通しをもって関わり、できた時にはほめて自信につなげていった。今後も一人一人の段階をおさえ、家庭と連携しながら生活面での自立に向けて支えていきたい。	A	A	・加配児という表現がわかりにくいと感じたが、説明を聞き、保育者達が個々の特性に応じてその子が困ったときにサポートし、よりよい人間関係へむけているということだと理解した。
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	・特別支援コーディネーターを中心に、一人一人の発達や個性を理解し子ども達に適切な対応を行う	特別支援コーディネーターを中心に、トーマスの会や特別支援研究保育を職員が参観し、加配児への理解を深めたり支援方法を一緒に考えたりした。担当者はサポートプランを作成し、保護者と面談を行い共通理解する事で、より丁寧なかかわりができている。加配会議や研究保育に出ない職員への周知が課題である。	B	B		・加配担当以外の職員も、トーマスの会を見学したり参加したりと携わるようにし、特別支援に対する理解を深めていく。
		(1)組織体制の充実	・各分掌としての役割に責任を持って発信すると共に、職員全体で共有・見直しを持ち、協力しながら教育保育を進める	年間計画に沿って企画をすすめる中で、分掌以外の職員も自分のクラスへの取組みを意識し、話し合いや声の掛け合いをしている。月2回の会議や打合わせで進捗状況を報告し全体への周知を目指しているが、全員が参加できない事もあり周知しきれない状況や分掌間での温度差など課題もある。	B	B	・保育者達の研修内容は市から下りてくるものだと認識していた。保育者の資質向上のために様々な内容の研修に各自希望の内容のものに参加していることを知った。
6 研 修	(1)研修体制の充実	・研修部を中心に研修テーマに沿った研修を進めると共に園外の研修に積極的に参加し、職員の学びを深める	外部研修は自分の希望で参加し、職員へ回覧で報告するなど年間を通して学び合う事が出来た。また、自園の研究保育では、職員皆で子どもの姿について検討し考察する事ができ、子ども理解について学び合えた。今後も継続していくと共に、さらに協議の視点などを分かりやすくし、職員自身の意見を発表できるよう工夫しながら学びを深め、保育に生かしていきたい。	A	A		・子どもの姿を見ている保育者のかかわりを大切にできるよう、研究保育を通じて職員間で学んでいく。また、外部研修や外部の公開保育で学んできたことを職員間で共有できるよう時間をとったり、学びを深めていく。
		(1)教育・保育環境の充実	・子どもの感じている面白さを捉え、繰り返し試したり工夫したりできる環境を整備する	子どもの興味や関心を捉え、一人一人が自ら遊びを選び取れるよう、毎朝園庭の準備と遊びに合わせた環境の工夫をしている。遊びながら子どもと一緒に必要な物を考え整える事で友達と繰り返し遊ぶ姿が増えた。さらに個々の発達や要求に合わせた環境や教材の用意を意識しているが、その都度準備する難しさもある。職員間で声を掛け合い時間を作るなど日々環境の改善を工夫している。	A	B	・保護者アンケートを確認したところ園に対しての良い評価がたくさんあったので保護者と園とが良い関係が築けていることが伝わってきた。
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	・様々な方法で日々の様子を分かりやすく伝えたり、保護者と面談等で子どもの育ちや良さを共有したりする	幼児はボード、乳児は連絡ノートで毎日の園の様子を伝え、子どもの成長を家庭と共有できた。今年度から乳児にも希望面談を取り入れ、家庭と園で、子どもの姿を共通理解する事につながった。コロナの影響で行事に保護者が参加できない分、写真を多く取り入れるなど工夫する事で、保護者からも喜ばれた。	A	A		・全園児を対象にした面談を行い、家庭での様子や子どもの育ちを保護者と共有することで、園と家庭と一緒に子どもを育てていく関係を築いていく。
		(1)近隣の園との連携の推進	・近隣の園や小学校の公開保育や公開授業に参加し、情報交換をしたり、学びを共有したりする	他園の公開保育に、正規だけでなく会計年度職員も積極的に参加している。事後研修まで参加することで、保育の振り返りができ、学びを深めている。また、近隣の小学校へ職員が公開授業に参加したり、公開保育を見に来たり交流を持つことができた。	B	B	・幼小接続の観点から、園から小学校への情報提供は必須と感じるが、保護者の同意がないと行えないと知り、現代の子どもを取り巻くシステムに難しさを感じた。
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	・地域の未就園児の学ぶ場や保護者同士が交流できる場を提供したり、地域の方に積極的に挨拶をしたりし地域の方と交流を持っている	おしゃべりサロンは温かい雰囲気を感じて行うと共に、園の様子が見えたり見学も毎回行う。手作り玩具をお土産で渡し、ぬくもりを感じてもらい親子の触れ合いに繋げている。また、散歩時は職員から挨拶し、積極的に地域の方と接する機会を増やすよう心掛けているが、今後はさらに情報のアンテナを高く持ち、地域に目を向け新たな交流に取り組む。	B	B	・ボランティアのよえん会の会や一人暮らしのお年寄りとの交流など、今後地域との連携をもつ機会を増やしていったらどうか。	・小学校へ園児が行き、校庭や学校内を見学したり、交流したりすることで繋がりを深め、子どもが小学校へ安心して向かっているようにする
		(1)信頼される園づくりの推進			B	B	・お話の会やおしゃべりサロンを通じて、地域の方と交流したり、近くの施設に訪問することを働きかけていくなど、園から地域へ窓口を広げていくようにする。